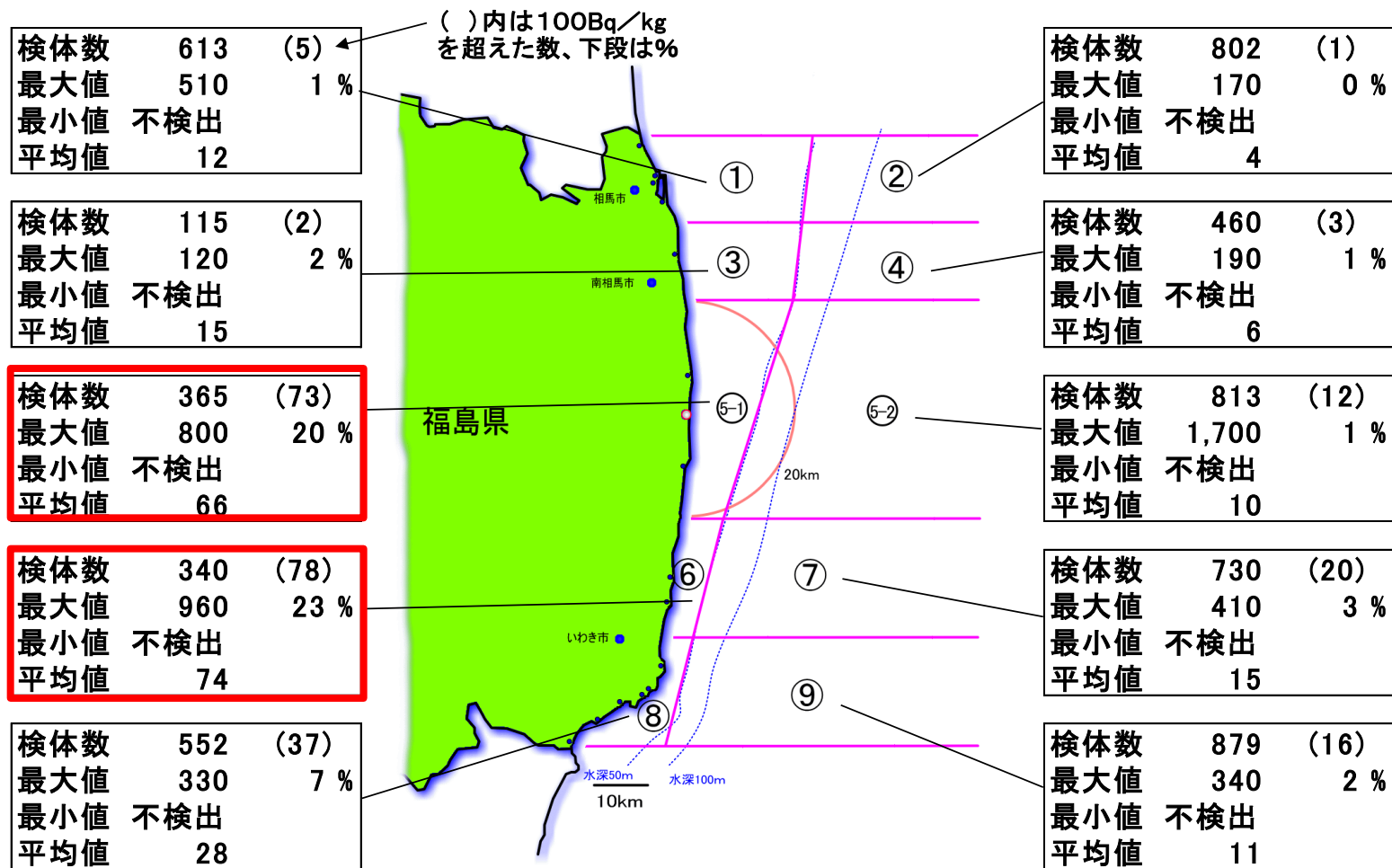


魚介類の放射性物質濃度の傾向

1. 原発の南側、本県沖水深50m以浅で濃度が高い魚介類が多い
2. 水深が深くなるほど高い濃度の魚介類が少ない
3. 魚介類の種類によって、濃度が低いものと高いものがある。
4. 時間の経過とともに速やかに低下したものがある。
5. 濃度が非常に高かった魚種でも、長期的にみれば低下傾向が明確にみられる。

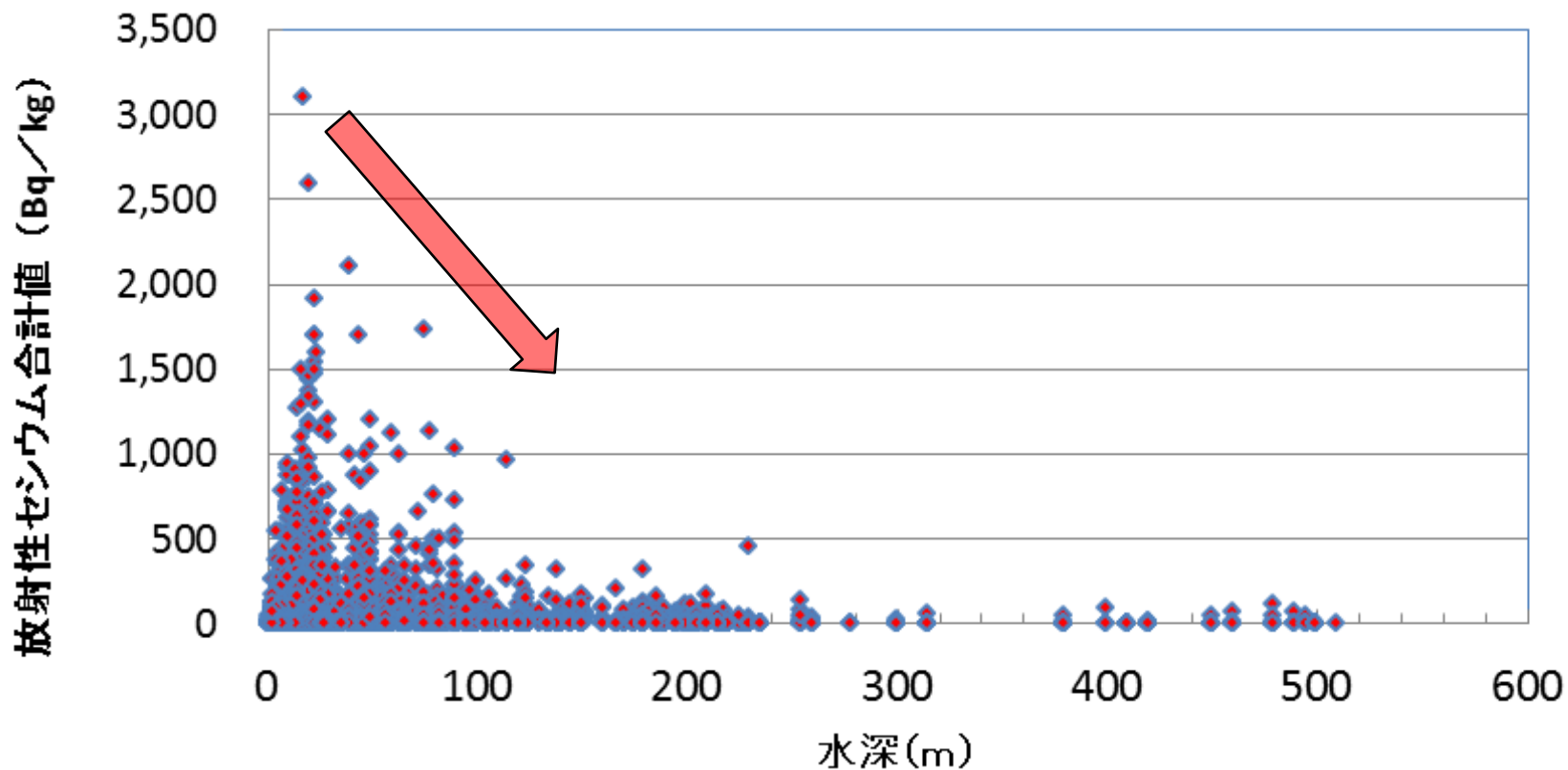
原発の南側で浅い水深の⑤-1や⑥の海域では、放射能の高い魚介類が多く、沖合や原発より北側の海域では少ない傾向がみられます。



魚介類のエリア別の検査結果概要 (全魚種 H25.1.1~H25.9.30)

数値は134Csと137Csの合計
平均値においてNDは0として計算

水深が深くなるほど、放射能の高い魚介類は少なくなる傾向がみられます。



水深と放射性セシウム濃度の関係
(平成24年1月-9月)

低い傾向の魚介類の例

平成24年1月以降ほとんど不検出



シラス
(世代交代早い)

カツオ
(回遊性)

キチジ
(深い水深)



甲殻類

タコ・イカ類

貝類

ナマコ類

魚種による傾向

特に高い傾向の魚介類の例

主に沿岸性・定着性の強い魚類で高い傾向がみられます。

事故後2年半を経過した現在も放射性セシウムが100Bq/kgを超えるものがみられる主な魚種



メバル類



沿岸性のカレイ類



ヒラメ



スズキ



アイナメ



コモンカスベ

軟体動物や甲殻類では2012年2月以降100Bq/kgを超えたものはありません。
 現在、100ベクレルを超えるものは魚類の一部のみです。

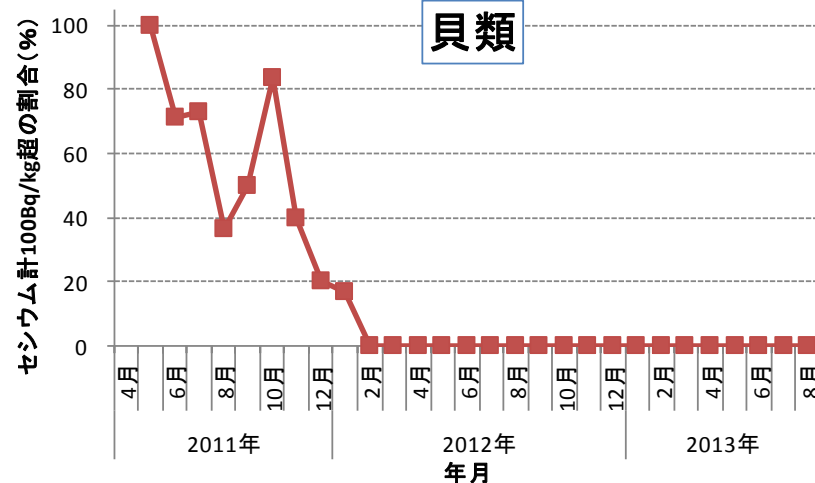
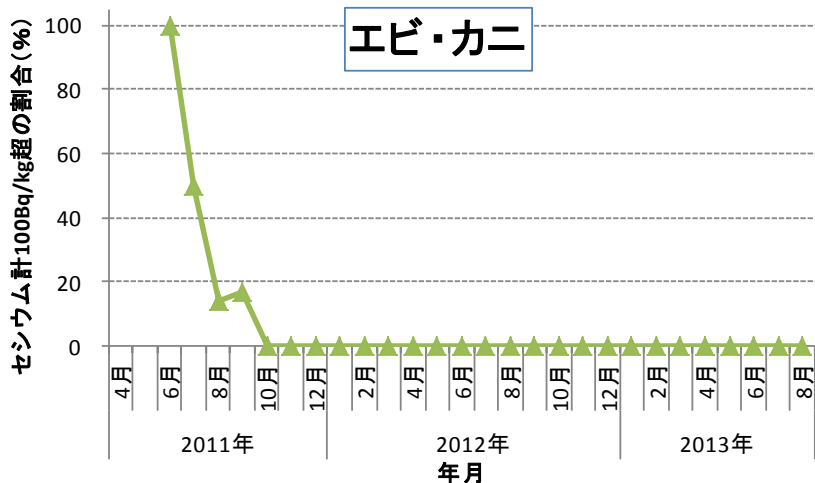
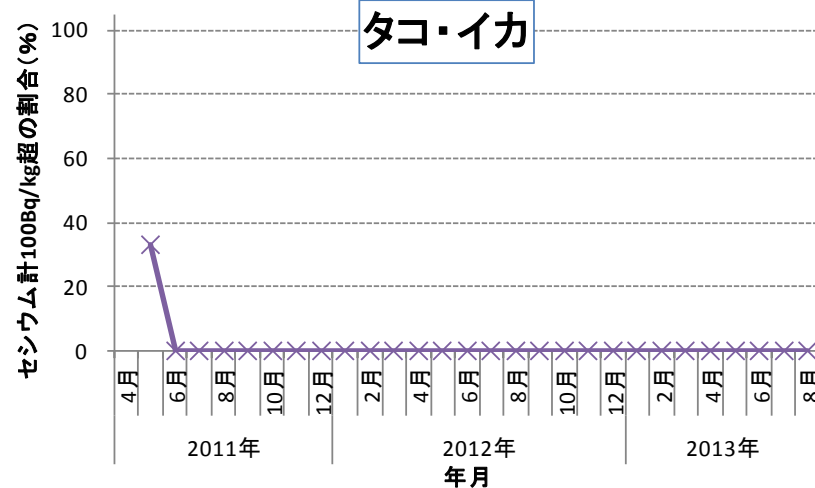
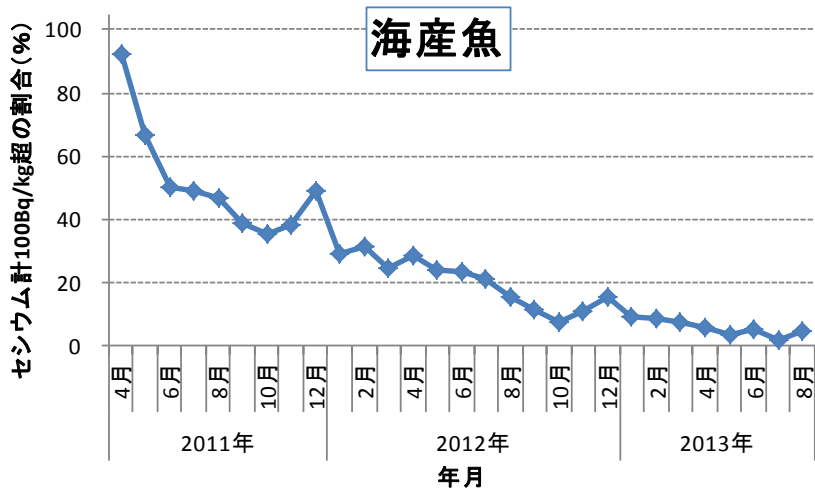
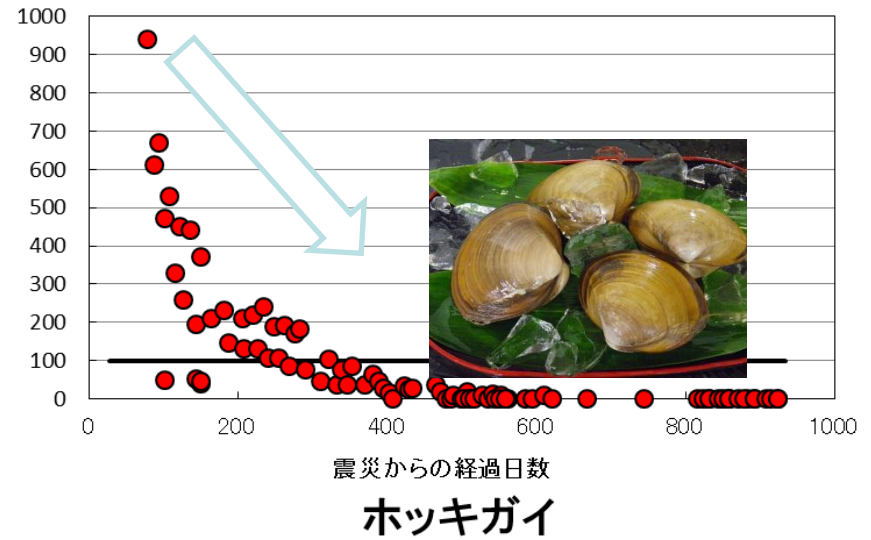
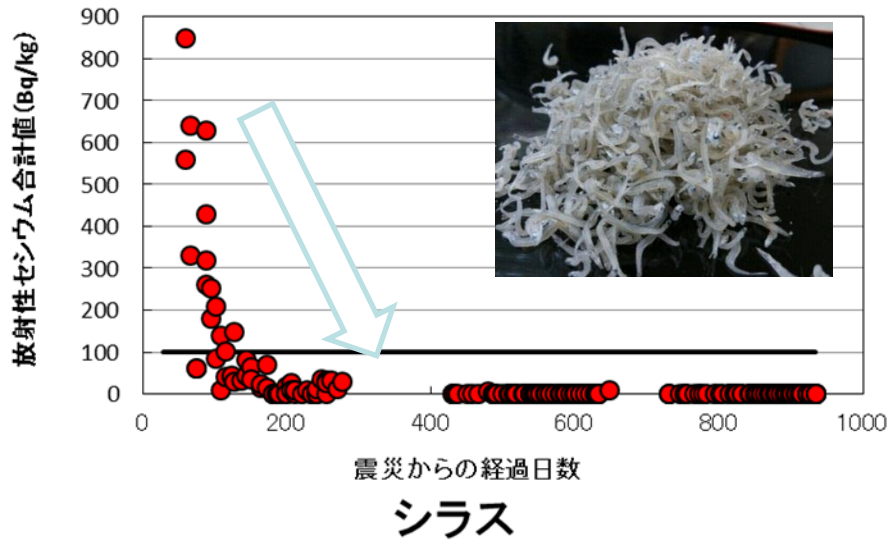


図 セシウム100ベクレル超過の割合(種類別)

○明確な低下傾向を示した魚種

シラスやコウナゴは、事故直後は高い濃度でしたが、世代交代が早く、事故直後の高濃度汚染水の影響を受けなかった群れに入れ替わったことによって、速やかに濃度が低下しました。

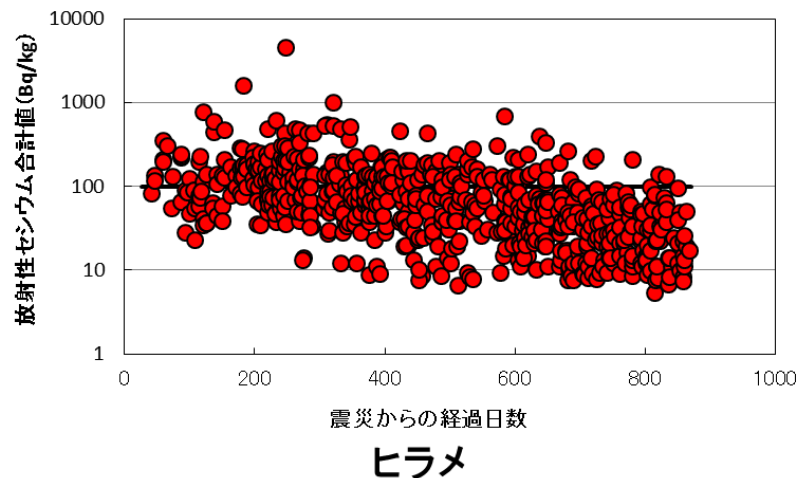
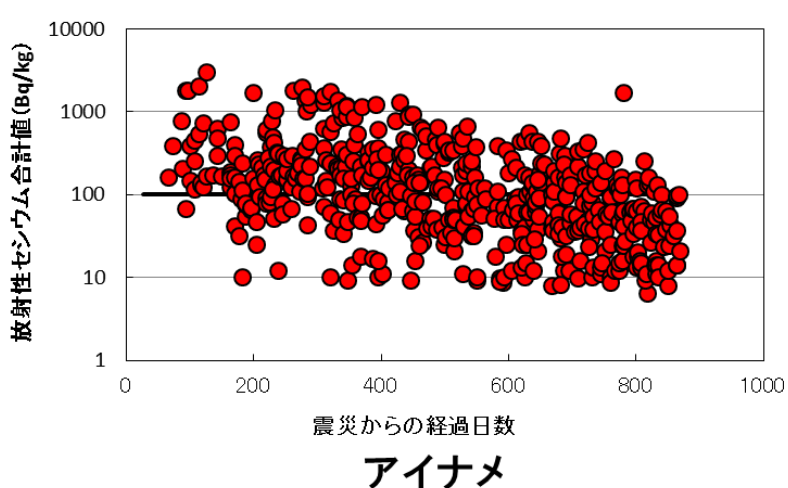
また、放射性セシウムを蓄積しにくいとされる甲殻類や軟体動物、海藻類などでも、速やかに濃度が低下しました。



○比較的濃度の高い魚種でも低下の方向

沿岸性や定着性の強いアイナメ等においては、当初、濃度の低下が明確ではありませんでしたが、時間の経過に伴い低下の傾向がみられています。

これらの魚種は、生息環境や事故直後の生息場所、年齢等によって、濃度の個体差が大きく、短期間では低下の傾向が明確にみられなかったものと考えられます。



検体数と100ベクレル超過の割合

震災直後は50%を超えていたが、最近は5%以下となりました。

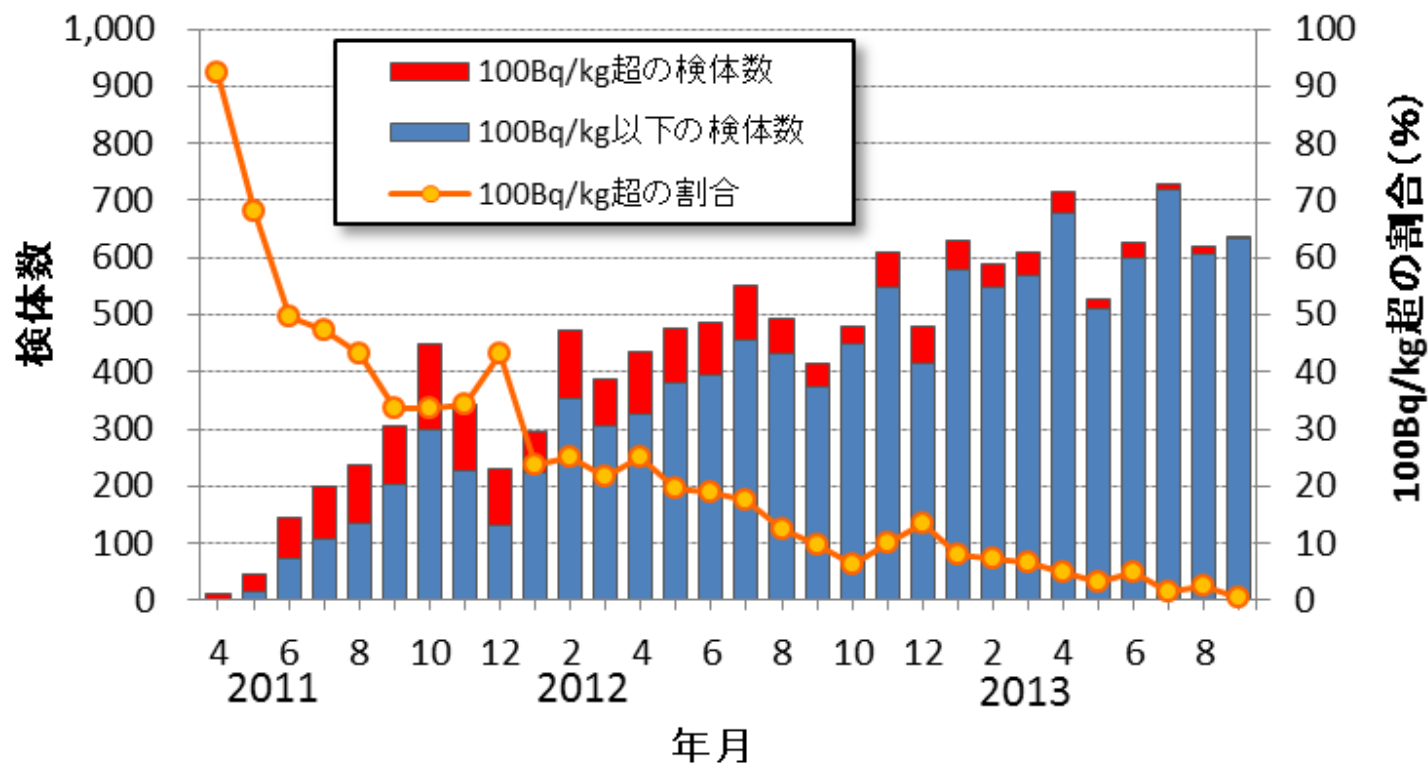


図 検体数と放射性Csが100Bq/kgを超えた割合